



湖の諏訪^{うみ} 御神渡り

温暖化の影響もあり御神渡りの神事が行われなくなつて久しいが、2年前の1月下旬の早朝、雪の降り積もる中、寒さに震えながらの取材となった。お伝えする神事を司つてきたのは長野県諏訪市小和田の八劍神社である。「御神渡り」の記録によれば、江戸期の天和3年（1683年）から小和田村（当時）の役人が拝見役を務め、現在は氏子総代が神事の伝統を受け継いでいる。歴史は古く、平安時代末期に遡る。歌人の源朝臣頭仲が、

諏訪の海の氷の上の通ひ路は、神の渡りてとくるなりけり

と詠んでいる。御神渡りは湖が全面結氷し、バリツ、バリツ、という大音響を発しながら、氷が迫り上がって湖を貫いてゆく訳だが、氷点下10度以下の日が数日間続かなければ起きない自然現象だと地元民は言う。

昔から神様が氷の上を渡られた跡であることを受け止めて、御神渡りができるまでは、氷の上に出てはならないと言ひ伝えられている。古式ゆかしい氷上神事もまた心地よいものである。

（写真・文 樋口健二）